

# ほんない歴史通信

第63号  
2012.6.1

天狗党西上(一) 大子で戦う(ある従軍日記から)

元治元年の天狗・諸生の戦いは幕末の水戸藩の大事件だった。根本的には水戸藩の継嗣問題にあるといえる。第八代藩主斉脩(なりのぶ)には子が無く、病が篤くなった為、藩内は將軍家から藩主を迎えようという一派と、藩主の弟斉昭を藩主にという一派の対立があった。その頃幕府は外圧により、勅許もなく下田、函館、長崎、横濱等を開港したので尊皇攘夷派から反対される。この問題で時の大老井伊直弼を責めた斉昭その外の大名が蟄居謹慎を命ぜられた。また勤王の志士が逮捕され安政の大獄に発展。水戸藩では井伊直弼を討つべしと桜田門外の変を起す。こうして幕府の権威は地に落ち、各藩内でも勤王と佐幕の対立が激しくなった。水戸藩では天狗・諸生の対立となる。

天狗派は攘夷鎖港を唱えて筑波山に依り大平山に屯集した。藩士、義民、寺社方等およそ五〇〇〇人余。幕府に攘夷の願を奉ったが許されず、国元においても議論は二分したので、松平大炊守(宍戸藩主)が目代として水戸城に入ろうとしたが、城内は諸生派が優勢で発砲され、奏上も容れられず、ついに追討として襲来発砲された。さらに幕命による諸侯の兵に包圍攻撃される事態になり止むを得ず防戦するのみとなる。

こうして九月二十二日磯濱焼失、二十五日平磯焼失、この日部田野原(へたのはら)で大会戦、豊田彦之丞戦死、十月十日一

本松大会戦で敵二〇〇人を討つ。十五日より十八日まで大会戦。しかし諸侯を相手に戦う事が目的ではないので上京して尊攘を請わんと、十月二十三日那珂湊を立出する。それから中根村へ出、さらに逆井手村へ出る。ここで潮来勢が合流した。瓜連村に休む。二十三日大宮に至る。この民兵数百人木砲を打ち並べ砲発しける故、砲戦して追い払う。この夜大宮宿に泊まり翌未明立出す。山形(山方)村に休む。それより右は奥州筋、左に入りて谷川を渡り三里余行きて峠を越えて、その夜の四ツ半時によつよう里に出る。二十四日夜大沢村泊まり。此村里人居らず逃げ去りけりければ食事に難儀す。翌朝見つけて食事をととのう。その後立出して峠を越え大子宿に近寄りし所、民兵共木砲を以て打ち掛かりし故暫く砲戦、その後追い払いここに止宿す。二十五日夜大子宿に泊まり翌日思い思いに宿を見つけ止宿、且山上に見張陣小屋をしつらえる。二十六日大子逗留。

二十七日この日袋田付近に行きて百姓共を手なずけんとするが、却つて恐れて逃げ去り皆月居峠に逃げ登る故大子に帰る。

二十八日この日武田君を大将として潮来勢天勇隊およそ三〇〇余人にて月居峠を攻め取らんとして行きしに早くも之を悟りて、民兵共峠の頂上に箆簾を押し立て大木砲を並べて近寄るやいなや鯨波を上げて打ち出しける故、味方山の半途に至らんとするとき山上より大石を打ち落とし進み難く、この時大将下知してまづ先に進み味方を励まし我先にと揉みに揉んで攻め登るに、山の八合目に至る頃大小の石霰の如く打ち落とし、大銃小砲頻りに打ち出しける故進み得ず。この時潮来勢に岡部貞次良とて知勇他に優れし者有りけるが、奇兵に回らんとして士卒に下知して回りし所に、敵方之を見てすわや大将なるぞ討ち取れとて筒先そろえて打ち出せし故、さしもの岡部も頭を打ち抜かれて死にけり。味方も困り果て居りけるところに朝倉弾正肩を撃たれ退ぞく。依つて一同山上を引陣して大子へ帰陣す。

(石井)

## 伊勢参り異聞(一)

大子郷土史の会 野内泰子

江戸時代伊勢参りに行くことは、庶民の夢であった。

しかし、伊勢は遠い。夢は、夢のまま実現することなど滅多にあるものではない。それでも、江戸に住んでいる者の中には講中を組んだり、抜け参りと称して雇われている店を抜け出して背に柄杓をさして途中途中で食べ物やお金を乞いながら伊勢参りに出掛ける者もいた。伊勢参りが盛んになってきたのは、江戸時代に入り御師といわれる人たちが、全国を巡り伊勢神宮の神威を庶民にまで広め高めた為だろうといわれる。しかし、地方の田舎の村から伊勢参りに行くなど、とてもできることではなかつたろう。なにしろ、勝手に住まいを離れ何ヶ月も旅するなどなかなか許されるものではなかつたのである。

それでも、やはり伊勢参りに出掛けた人はいた。先年、NHKの教育テレビで、庶民の伊勢参りがどのように行われたかの放送があつた。伊勢神宮に寄せる人々の思い、それを実行するにあつての苦労や細かい心配りなど、残されている資料からわかる事をまとめ、わかりやすく放送してくれた。実は、この伊勢参りに行き記録を残した高柴村(茨城県大子町高柴)の益子廣三郎は、私の母の実家の先祖であり、伊勢参りから帰つた後に父親のあとを継いで高柴村の庄屋となつた人である。伊勢参りに出掛けたのは、文化九年一月。およそ三ヶ月の旅であつた。

これは、記録で見ると限りかなりきちんとした伊勢参りであつたことがわかる。しかし、伊勢参りにもいろいろな形があつたことが、我が家の祖母の話や生い立ちからみえてくる。前に書いた大藤嘉右衛門の話の時にも登場した私の祖母多津は、隣の肥後家から嫁いできた。しかし、ここは、実家ではあるが生家ではない。生家は、福島・小名浜(現いわき市)の馬上家である。もとの名は馬上多津と言つた。父親の肥後六左衛門は、ある時、伊勢参りに出掛けた。祖母多津の生年万延元年(一八六〇)から考えて多分、安政四、五年位のことではなかつたか。前述の益子廣三郎の伊勢参りから約四〇年後のことである。

当時、地方の者が伊勢参りに出掛ける時は、近隣の住民や親類などから餞別をもらい、その代参と言う形で行つたことが多かつたらしい。益子廣三郎の記録にも、土産の中に一二〇枚ものお札が含まれていることからわかる。しかし、肥後六左衛門の伊勢参りは、そのようなものではなく、ごく個人的な、いわば物見遊山のものではなかつたかと思われる。このことは、その後の行動からも推測される。

関東とはいえ、むしろ南奥州といった方が早い山の中のこの地方まで、御師が回つてきたのであるうことを想起させる。

六左衛門の旅の詳細についてはわからないが、帰り道、まっすぐ家に帰らず浜街道を辿り福島の小名浜まで行つた

ようだ。そこで、しばらく滞在することになったようだが、何故、小名浜なのか、何故そこに滞在したのかは全くわからない。いずれにしても小名浜滞在は長期に及んだのである。そのうちに、六左衛門は、この地の馬上家の娘が気に入ったのか婿入りしてしまった。そして娘が生まれた。これが、多津である。その後、六左衛門は小生瀬の実家に帰ってきた。妻となった馬上家の娘を連れて。六左衛門は多分小名浜から何度か文を出していたのである。婿入りしたことも娘が生まれたことも知らせたものと思われる。伊勢参りに出掛けたまま帰って来ない嫡男の思いがけない行動に肥後家の驚きはいかばかりであったか。はるばる小名浜まで行き息子を取り戻して来たのではないだろうか。その時妻も伴って帰って来たが、娘は置いて来た。多津は、馬上家にとって大切な跡取り娘だったからである。ここで余談だが、栃木県那須塩原市の那須温泉街の中にもこの町役場があるが、そのすぐ近くに寺があり、その境内の中に江戸時代かの有名な吉原の遊女高尾太夫の墓がある。高尾太夫と言うのは数名いたそうだが、その中の一人、絶世の美女であり才女であった。この墓の主は、小名浜の馬上家の出身であり、弟は有名な絵師となったと墓のそばの由緒書きにある。祖母の生家の馬上家と縁があるかどうかはわからない。

ところで、小名浜に取り残された多津は、祖父母に育てられたが、その祖父母も亡くなり一人になってしまい、寂

しくてどうしても父母に会いたくなり小生瀬村までやって来た。一六、七の娘が、どこを通ってどのようにして小生瀬の父母の元に辿り着いたのか。小名浜の馬上家に生まれた経緯、小生瀬の父母に会いに来た事などは、祖母の口から直接聞いた。しかし、小名浜から小生瀬までの道中については聞き漏らしてしまった。実家の兄（大藤和久）に聞いてみたが、やはり、そのところは聞いていないとのことだった。祖母が生まれたのは、今から一五二年前、一三五年ほど前の小名浜から小生瀬までの道程はどんなものだったのだろうか。どの道を通ってもいくつもの山を越えなければならぬ。とても想像できない。

ともあれ、小生瀬に辿り着き父母や弟達に会った祖母は、そのまま、そこに居着くことになった。そして、その一、二年後に隣の大藤千松嘉恭に嫁いだのである。

曾祖父が伊勢参りに行かなかつたら、小名浜まで寄り道をしなかつたら、祖母はこの世にいかなかった。勿論、私も。こんな伊勢参りもあつたのである。



## 初原川の龍神淵に棲む龍の話

大子町初原（旧佐原村）を流れる初原川は、標高六三六メートルの花瓶山に発し、左貫、初原を南流して上岡で押川に合流し、大子町役場付近で久慈川本流に合流する。昔、初原川の西側を鋤柄村、東側を初原村と言ったころの話である。

初原川を挟んで辰口集落にある鹿島神社の北西の山麓に朝日長者、東の小高い台地上の山麓に夕日長者が住んでいた。二人の長者は広い屋敷をもち、大きな家に住み、金持ちであったので、村の人たちからお大尽様と呼ばれていた。二人の長者は奉公人を使用し、川沿いの荒地や山の斜面などを開墾し、田や畑を開き村人達のために尽くしてきた。しかし、朝日長者は鋤柄村、夕日長者は初原村の住人であったので二人の長者は仲が悪く、何かにつけて争いが絶えなかった。このような二人の長者のふるまいを鹿島神社の西側を流れる初原川の龍神淵に棲む龍がじつとみていた。

龍神淵があるところは、川沿いに大きな石があり、増水時は流れがその石にぶつかり、大きな渦巻きをおこし、川底を押し流してきたので、川底と石の間に大きな穴がつくられていた。村人は、この川底の穴に龍が棲み着いていると信じ、その龍を龍神様と呼び、日照り続きの日には雨乞いの祈願祭を行ってきた。しかし、二人の長者の仲が悪いのを見つめてきた龍は、これは幸いとばかり、真夜中になると川からはい出して田や畑の農作物を荒らし回るようになった。龍の暴れは日に日に激しくなり、農家が飼っている馬や鶏、さらに人間にまで危害を加えるようになった。村人は夜も眠れない日が続き、大変困ってしまい、里長を中心に話し合いをしたが、なにしろ相手は龍なので、龍に対抗するだけのよい解決策は見出せなかった。

ある日のこと、村人が道普請をしていると、諸国を巡錫しているお坊さんが、この村にやってきて、土手の石に腰をおろし休息をしていた。村人から見ると、まとっている衣はみすばらしかったが、表情が豊かで徳のあるお坊さんに見えた。村人はお坊さんに相談をもちかけた。村人は「初原川の龍神淵に棲む龍が真夜中になると川からはい出して、村中をはい回り農作物を荒し、家畜を殺したり、人間にまで危害を加えたりしている様子」を訴えた。

すると、お坊さんは立ち上がり、手に持っていた錫杖を高く振り上げてしばらく呪文を唱えていたが、村人に向かって「龍神淵に棲む龍が暴れ回り、村の平和を乱しているのは、東の夕日長者と西の朝日長者の仲が悪いからである。二人の長者が仲よくなれば龍は暴れなくなり、村は平和になる」と伝えた。

村人はお礼を言って、里長の家に行きこのことを話すと、里長はさっそく二人の長者と連絡をとり、寄り合いを開いてお坊さんの言ったことを伝えた。二人の長者は深くうなだれながら「これ以上村の皆さんには迷惑はかけられない」と言って仲直りをした。このことがあってから龍は村の中をはい回り、暴れることがなくなり、村は平和になったという。

ある日のことである。村人は驚いた。龍神淵からはい出した龍が鹿島神社の方に頭を向けて大きな岩になっていた。この岩は「尾辰岩」と呼ばれ、「タツの口」に似ているところから、この地の小字名が「辰口」という地名になったと伝えられている。

また、後になってみすばらしい姿・格好をしていたお坊さんは弘法大師様とわかり、辰口坪（組）では、お堂を建て弘法大師様が腰をおろしていた石を弘法堂の御本尊として祀っている。縁日として一月二十一日と八月二十一日の年二回を弘法大師様への感謝、五穀豊穡、無病息災の祈願の日としている。（小澤）

## 奥久慈の魅力を知り、味わう指南書の誕生

斎藤和子著『いばらき 奥久慈すたいる』に寄せて

素敵な本、『いばらき 奥久慈すたいる』が発刊されました。著者は、斎藤和子さん。茨城県に移って来られた昭和五十八年以来、主婦業のかたわら、とくに茨城県北地域を幅広く取材され、例えば『常陸そば街道 酒街道』、『水郡線で行くカントリーウォーク』、『水郡線スローフード物語 里山の恵みを存分に』など、数多くのガイドブックやパンフレット類を編集・執筆なさってきた方です。その斎藤さんが、大子地方に住む人たちの深い交流によって得られた知見をもとに、奥久慈の自然に寄り添った暮らしと食文化について少しでもお伝えできれば、「はじめに」ことの思いを込めてまとめられたのが本書です。

大子町の現実、残念ながら、多くの山間地域と同様に厳しさを増す一方です。人口は減り続けているし、高齢化率は茨城県内で最も高い三七%に及んでいます。そうしたなか、大子町の資源を活かし、地域の魅力を内外に発信する視点からのまちづくりがますます大事になっていることを考えると、実にタイムリーな出版であるように思います。多くの方には是非手に取っていただきたいと考える所以です。

さて、本書を簡単に紹介しましょう。本書は「春」、「初夏」、「夏」、「秋」、「冬」の五章から構成されていますが、それらの季節ごとに特有の素材が紹介されるとともに、その素材の活かし方が、カラー写真とともに丁寧に解説されています。一例を挙げましょう。「初夏」編には、「ふき」が登場しますが、その活かし方として「きゃらぶき」、「ふき菓子」、「ふきの甘酢漬」、「ふきの油炒め」の作り方が、また「ふきの保存方法」



や「ふきの戻し方」も同時に示されます。ちなみに、素材の活かし方がいくつあるかを章ごとに数えてみました。すると、「春」には一二、「初夏」には一九、「夏」には一三、「秋」には四、「冬」には一七通りの活かし方が盛り込まれていました。これらは、山里に暮らす人たちのまさに知恵の結晶、生活「すたいる」そのものだといっても過言ではありません。

こうした知恵を丹念に掘り起こし、文字に刻んだのが本書。そこには、奥久慈地方に対する著者の温かなまなざしが強く感じられます。先人の知恵に学び、暮らして活かすことの大切さを伝える本書の一読を、多くの人にお薦めしたいと思えます。

(斎藤典生)

本書は、道の駅「奥久慈だいら」で販売しています。お問い合わせは、東茨城郡城里町那珂西一二〇一 六の斎藤和子さん宛にお願いします。平成二十四年三月刊、定価一、二〇〇円。

### 肥後和男氏寄贈資料について(三)

肥後和男は昭和五十一年発行の『大子史林』第五号に「大子町の信仰」を掲載している。そこで、「近津神社が稲作の神として郷中から尊崇された」と述べている。御枡小屋の神事(御枡廻し)が、昭和三十九年には行われたというが、今では、伝聞でしかたどれない。そこで参考資料として、昭和十九年十月九日に、肥後和男が下野宮近津神社の谷田部冠雄から「御枡廻祭」について聞き取り調査をしているので次に紹介しよう。

御枡廻祭 イ 出社行列次第 口 御枡に就いて 八 仮殿  
二 頭人 亦 当祭祝詞 へ 御枡所次第(出社場)

当社に於ては春の祈年祭に於て例年正月十五日早朝行はるる御筒粥の神事に於て発芽の良種粉を氏子に分与し、而して年の豊饒を祈り冬の新嘗祭に於て氏子より粉を奉納し候て神に謝意を表したるものと見えて田植古図絵にも其の由、書かれたり、但し、八槻にては十一月の大祭に於て、氏子社前より藁苞を受くるを例とせり、而して両社何れも配布の粉は之を都て母と称し氏子奉納の藁苞は之を都て子と倣せり、現に当地方小作者の地主に納むる俵は之を都て子と称して其の名残を存す

其の筒子別が所謂社名都々古和気となりたるものなる事明なり、然れども八槻都々古別神社にては何しか廃し独り当社のみ現に例年祭事を執行しつつあり

#### 御枡廻

往古の祈年神嘗の両祭なり、即ち春季の旧正月二十七日二十八日、冬季の旧十月二十七日二十八日にして保内郷各町村所定の場所に神輿渡御の大祭、一名、御枡廻の祭と称す

八槻都々別神社にも往古同種の祭ありたり、同社文書に曰く、旧正月二十七日出社、二十九日帰社、二十七日神幸ある村を頭といひ、その概当人を頭人といふ、二十八日に神幸ある所を脇頭と

いふ、新嘗祭は旧十月二十七日出社、二十九日帰社、その儀、一に祈年祭に同じ、頭人に属する者に家に公文升取、群令といふ、仮宮に神幸を迎へて、之に奉仕す、仮宮の傍に升屋を作り、之に升を安置す、或は一、或は二、其村に依て同じ、故に其頭に当る事を升廻と称す云々

尚、当祭は後鳥羽天皇建久二年亥歳(一一九二)十月始めて出社となりし由なるが戦国の代となり、一時弊れしを徳川時代に入り元禄八乙亥歳十月二十七日小川村に於て再び出社の例を開きしといふ

#### イ 出社行列次第

一 浅川村獅子 案内役 猿田彦神 五色吹抜旗 猿田彦神  
太鼓 祭礼旗 神馬 世話人 佐竹御旗 徳川御旗 神官 御  
日月錦旗 御弓 示人 神用長考 御神 高張 賽銭箱 御神  
輿 役人 神用長持 大鳥毛 大熊毛 鎗 大宮司 役人 庄  
屋 組頭 保内役員  
口 御枡に就いて

御枡は保内町村に十月正月共に七箇宛ありて、廻祭の順序ありて、即ち前場の祭、終れば次回の頭人引継ぎて、之を御枡小屋に納め七ヶ年間安置す、御枡小屋葺茸くにて横七尺縦六尺なり、四方の囲も葺を以て編みたる簀を繞らし置く、御枡は粉を入れて菰に苞み台上に安置し前には御幣を立つ

#### 八 仮殿

仮殿は十月正月とも二十日迄に作製す、昔時は各村明神林とて用材を切出す林を仕立置きたり、仮殿の御棚とも称して神輿を安置す、此外、御枡小屋、神事殿、盥嗽所を設置す、登場の四方には注連を張る、其日の神事に於て大注連張と称す、

#### 二 頭人

祈年神嘗祭両祭に神幸ある村を頭といひ其の概当人を頭人といひ、世襲なり、場所により一人或は二人なり、二人の所は大頭小頭と呼ぶす、

頭人は前場より御柝より御柝を受けて之を御柝小屋に安置し七ヶ年間即ち神幸に至る迄物忌潔斎をなし清浄の身を以て神事に当る、而して一年一回(七ヶ年間)、祭日(二十七日)、当社に於て祈禱をなす

春冬共、二十日の大注連張には神官出頭神事を執行す、二十七日早朝神輿出社昇手遠きは宵詰、近きは早朝来社す、翌二十八日は還幸なるを以て仮殿は夕刻出興せざるべからず、出興の際、吹く風を御立風と称す、途中往復慰勞休憩の為、神酒を奉納し神輿を迎ふる事あり、之を御酒迎と称す、御柝は二十八日早朝丑の刻に仮殿後に御柝小屋に奉安し神輿御出発前、次回の頭人に式を奉げて相渡す、而して御立の式を行ふ、神輿は出社、歸社、異なる所より出入するを例とす(八槻も同じ)、例年、社側より出て参道の鳥居より帰はんとす

第一 御柝所次第 旧十月二十八日

第一 下宮村

落合 波原 中野 北平 下ノ内 田之草 中井 季平

駒坂 五郎之内

第一 池田 南田氣を加ふ

中之内 戸之内 上野 堀之内 平山 竹之内 久保

御子内 田中 横峰

第三 浅川

鴛頭 細竹 中井 牛骨 一之渡戸 栗木内 但馬山 和田

下之内 九奴木立目 池田 岡之内

第四 塙 金沢 高岡

田之沢 端地土 手崎 稻荷沢 大平 戸井戸内 手広内

南之内 沼之上

第五 下小川

大内野 北富田 沢内 九畝畠 檜沢口 岡 高居津理

今峯 戸之内 十石

第六 袋田

瀧本 小袋 五次郎内 岡 片根 中津原 大塩 南田氣  
東山 内方

第七 大生瀬

田戸神 日照 細草 富之草 馬瀬久保 久保田

下野宮近津大明神御頭七ヶ村

右精誠者七ヶ年宛相定者也、仍而如件

下野宮祭幣所五ヶ村 小生瀬 下津原 金沢 愛川 芦ノ倉

右此神事者、十月二十五日勤是者也、仍而如件

但、一年に一ヶ村宛五年廻也

旧正月二十八日

第一 上郷

宮本 中之内 石神戸 白坂 貝名坂 峯岸 下塙 川原子

道室内 稻村 坂之下 上塙 北原 下原

第二 八田野

小室屋敷 小磯 上葛洞 三角山 川山 下葛洞 玉田内

猫内 下大和田 根岸 川在家

第三 醍醐

高木屋敷 堀之内 上近町 後野津 前野津 北宿 長岡

下近町 此村へ大沢を加ふ

第四 初原 左貫を加ふ

岩之目 山口 下龍口 大石 中平 阿津保 杉ノ内 野路辺

第五 山田 栃原を加ふ

野田畠 宿内 塩ノ平 片通内 高久 足洗

第六 比藤

馬舟 大沢口 横石 大野 前野 原 中野

第七 高柴

戸ノ内 柳町 弓町 柏原 畠間 九奴木内 宮平 手越

岡之内 端地上 南之内 中之在家

御幣所五ヶ村 大野 九之瀬 北田氣 西金 高岡 真木野地

右此柝神事者、正月二十五日勤是者也、仍而如件

(野内)

## 平成二十四年度ふるさと歴史講座について

ふるさと歴史講座は、大子町の歴史について学び、郷土に対する理解を深めることを目的として開講するものです。今年度は、四回開催します。各回異なる講師がさまざまなテーマについて講義を行います。

歴史に興味のある方は、この機会にふるってご参加ください。詳細については、後日、お知らせ版でご案内します。

第一回 七月二十一日(土) 講師：野内正美先生(茨城県立歴史館資料調査員) テーマ：白河結城氏と依上保 会場：中央公民館

第二回(現地巡り) 九月二十九日(土) 講師：藤井達也先生(茨城大学大学院生) 行き先：都都古別神社、小峰城、

白河市歴史民俗資料館、白河の関跡

第三回 十二月一日(土) 講師：石井喜志夫先生(元小学校長) テーマ：(仮)昔の旅について 会場：中央公民館

第四回 一月二十六日(土) 講師：齋藤典生先生(茨城大学人文学部教授) テーマ：(仮)近代大子地方の金生産 会場：中央公民館



昨年度の様子(中央公民館講堂)



現地巡りの様子(常陸太田市内)

## ほない歴史通信について

ほない歴史通信は、平成八年十二月に郷土史研究家の会「大子遊史の会」により、ふるさとの歴史情報を満載する新しいミニコミ紙として創刊されました。以来一五年、号を重ねてこれまでに六二号までの刊行が続いています。しかし、様々な有益な歴史情報が掲載されているにも関わらず、発行部数が少ないため、会員に配布される以外は少数の関係者の目に触れるだけでした。

そこで、ふるさとの歴史を町民の皆様と共有し、後世に伝えるため、今号から教育委員会が発行し、回覧することになりました。また、読みやすくするため、B5判からA4判に拡大しました。ぜひ、ご愛読いただければ幸いに存じます。

また、大子町の歴史・文化・生活に関し発表したい情報がございましたら、教育委員会までご寄稿ください。なお、編集の都合上、掲載できない場合もございますのでご了承ください。(皆川)

編集 大子遊史の会

編集人 齋藤 典生(茨城大学人文学部教授)

野内 正美(茨城県立歴史館資料調査員)

石井喜志夫(元小学校長)

小澤 囿彦(元教育長)

皆川 敦史(大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館

☎ 0295(72) 1148